

Letters Archived in Hanai Memorial Room and Toyotaro Yuuki Memorial Museum : Four Letters from Takakusu Family to Ineko Hanai and Toyotaro Yuuki

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): Takuzo Hanai, Ineko Hanai, Tadashi Hanai, Toyotaro Yuuki, Junjiro Takakusu 作成者: 青木, 裕子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/864

Letters Archived in Hanai Memorial Room and Toyotaro Yuuki Memorial Museum: Four Letters from Takakusu Family to Ineko Hanai and Toyotaro Yuuk

AOKI Hiroko

Key words

Takuzo Hanai / Ineko Hanai / Tadashi Hanai / Toyotaro Yuuki / Junjiro Takakusu

Summary

The aim of this paper is to introduce the four letters that I found in conducting the research project of “Junjiro Takakusu Research Group” at Musashino University. Dr. Junjiro Takakusu (1866-1945) was a prominent Buddhist scholar and the founder of Musashino University. Our research group is conducting research on the life of Dr. Takakusu, his circle of relationships and his Buddhist and educational thoughts. I am hoping to contribute to our research project by introducing these letters.

Of the four letters that I found, three letters (Letter1; Letter2; Letter3) sat on the shelf in the Hanai Memorial Room (Chiyoda-ku, Tokyo) for many years, probably more than half a century. These letters were sent to Mrs. Ineko Hanai (1900-1982; wife of Mr. Tadashi Hanai (1894-1973; illustrious advocate and Attorney General of Japan) and daughter of Dr. Takuzo Hanai. Dr. Hanai (1868-1931) was a prominent advocate, legal scholar and political figure, and Dr. Takakusu’s lifetime best friend.) from Dr. Takakusu, Mrs. Shimo Takakusu (Dr. Takakusu’s wife) and Masao Takakusu (Dr. Takakusu’s eldest son).

I found another letter (Letter 4) in the Nanyo City Toyotaro Yuuki Memorial Museum (Akayu, Nanyo City, Yamagata Prefecture). Mr. Toyotaro Yuuki (1877-1951) was an influential figure of Japanese economy and held prominent positions such as Minister of Finance and Governor of Bank of Japan. This letter was sent to Mr. Yuuki from Dr. Takakusu.

The discovery of these letters would be meaningful to the research project from mainly five points of view:

1. Three letters found in the Hanai Memorial Room (Letter1; Letter2; Letter3) constitute primary source documents publicized here for the first time.
2. The letter displayed in the Toyotaro Yuuki Memorial Museum (Letter 4) is a primary source document treated as a meaningful historical document for the first time.
3. The letters are meaningful for knowing more about the founding period of Musashino University.
4. The letters are meaningful to knowing more about the deep relation between Hanai family and Takakusu family, based on the strong friendship between Dr. Takuzo Hanai and Dr. Takakusu.
5. It is meaningful to know about the relationship between Dr. Takakusu and Mr. Toyotaro Yuuki, an economic and financial magnate of the time.

To this end, I will first show the images of the four letters and explain their contents. Secondly, I will explain about the people concerning these letters, and discuss the historical background of these letters.

花井記念室および結城豊太郎記念館に保管されている高楠家の人々からの書簡
——花井稲子と結城豊太郎宛ての書簡四通について——

青 木 裕 子

花井記念室および

結城豊太郎記念館に保管されている高楠家の人々からの書簡

——花井稲子と結城豊太郎宛ての書簡四通について——

青木裕子

〈キーワード〉 花井卓蔵／花井稲子／花井忠／結城豊太郎／高楠順次郎

はじめに

本論文の目的は、本学の学院特別研究費を受給して開催されている「高楠順次郎研究会」⁽¹⁾（以下、高楠研究会と略す）の研究活動の中で、筆者がこのたび発見した書簡四通を紹介することにある。四通の内三通は、東京都千代田区所在の「花井記念室」⁽³⁾において筆者が発見したもので、高楠順次郎、高楠しも、⁽⁴⁾高楠正男がそれぞれ花井稲子⁽⁶⁾に宛てたものである。四通の内一通は、山形県南陽市赤湯所在の「南陽市立結城豊太郎記念館」⁽⁷⁾において展示されているもので、高楠順次郎が結城豊太郎⁽⁸⁾に宛てたものである。

これらの新たな一次資料の発見と紹介は、高楠研究会にとって、本学創生期の状況、高楠家と花井家の深いつながり、高楠順次郎と結城豊太郎との交流などを知るための一助となり、有意義な資料紹介となると考えて

いる。

この目的のために、本論文では、第一に、四通の手紙の内容について、表および画像と共に説明し、これら
の手紙から見えてくるものについて述べる。第二に、これら四通の手紙に関係する人々について述べる。そし
て最後に結論を得たい。⁽⁹⁾

一 四通の手紙

まず、本論文で紹介する四通の書簡の概要を説明する。完全な翻刻は、本稿には間に合わなかったため今後
の課題としたい。

「表一 花井記念室および結城豊太郎記念館に保管されている高楠家からの書簡」に四通の手紙の概要をま
とめたので参照されたい。次に、それぞれの手紙について画像をつけながら説明していく。

表一 花井記念室および結城豊太郎記念館に保管されている高楠家からの書簡

番号	資料名	日付	差出人	受取人	内容	保管場所	筆者による発見時期
一	花井記念室保管「花井家書簡」	年月日欠推定 大正十三年 (一九二四年) 一月～二月	高楠順次郎	花井稲子	武蔵野女子学院創立にあたり、 歴史を教えて下さいという依頼 の手紙。	花井記念室 (東京都千代田区)	二〇一七年七月
二	花井記念室保管「花井家書簡」	大正十四年 (一九二五年) 三月十二日	高楠正男	花井稲子	武蔵野女子大学設立に向けての 寄付に対する礼状。	花井記念室 (東京都千代田区)	二〇一七年七月

三	花井記念室保管「花井家書簡」 (二九二九年) 一月十一日	昭和四年	高楠しも	花井稲子	新年の挨拶。	花井記念室 (東京都千代田区)	二〇一七年七月
四	南陽市立結城豊太郎記念館保 管資料「結城豊太郎先生書翰」 (一九三七年) (記念館の分類番号七七)	昭和十二年 二月	高楠順次郎	結城豊太郎	結城の大蔵大臣就任を祝す手紙。	南陽市立結城豊太 郎記念館(山形県 南陽市赤湯)	二〇一二年五月

注・この表の内容は二〇一七年十一月現在のものである。

(一) 書簡一について

書簡一は、高楠順次郎が花井稲子に宛てたものである。手紙の内容の概要は、次のとおりである。

① 拝啓

② 四月から武蔵野女子学院で歴史を教えていただきたくお願いいたします。

③ どういう形で教えて頂けるか、ご都合をお知らせ下さい。

④ 来年には女専ができて今後大いに発展していく予定です。

⑤ よろしければ急ぎ履歴書を送って下さい。

⑥ 高楠順次郎

⑦ 花井令嬢

手紙本文中に日付けが記されておらず、また、切手に押された消印の日付けは解読困難であった。このため、今のところ(二〇一七年十一月現在)、手紙が書かれた日付けを特定化できていない。これは今後の課題としたい。しかしながら、次の五つの事実から書かれた時期を推定することができる。

① 高楠順次郎が手紙の中で、「四月から教えていただきたい」、「急ぎ履歴書を送って下さい」という旨述べられていること。



画像一 書簡一の画像

出所：花井記念室に保管されている書簡を筆者が撮影。



画像二 「武蔵野女子学院奉職者御芳名」プレート

出所：武蔵野大学武蔵野キャンパス雪頂講堂において筆者が撮影

② 武蔵野大学武蔵野キャンパス雪頂講堂にある「武蔵野女子学院奉職者御芳名」のプレート（画像二参照）にも示されているように、花井稲子が一九二四年から一九五〇年まで武蔵野女子学院の教員の名に連ねていたこと。⁽¹⁰⁾

③ 『武蔵野女子学院八十年史』によると、花井稲子は「地歴の」教員として一九二四年四月から武蔵野女子学院で教え始めたこと。⁽¹¹⁾

④ 一九二三年九月に起こった関東大震災により東京が焦土と化し、高楠は一九二四年四月から武蔵野女子大学を開学するという計画の変更を余儀なくされた。元々高楠は、女子大学を創立してから女学校を創立しようと考えていたが、一九二四年一月の初春に方針を転換し、まずは女学校を開学してから、女子大学を開学することとしたこと。⁽¹²⁾

⑤ ④に示された高楠の方針転換により、武蔵野女子学院が一九二四年三月七日に築地に開設されたこと。⁽¹³⁾ これらの事実から、高楠順次郎が花井稲子に手紙を書いたのは、大正十三年（一九二四）の一月、もしくは同年二月と推定される。

(二) 書簡二について

書簡二は、高楠順次郎の長男高楠正男が花井稲子に宛てたものである。手紙が書かれた日付けは、大正十四年（一九二五）三月十二日、すなわち、武蔵野女子学院設立から一年が経過した時期である。手紙の内容の概要は次のとおりである。

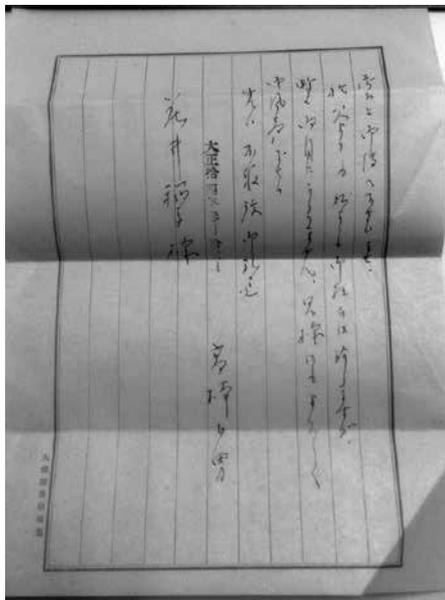
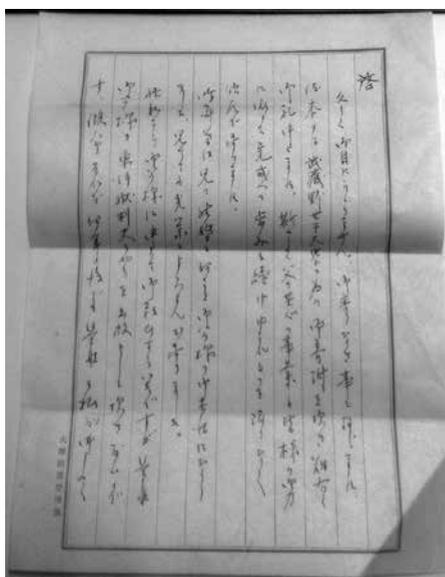
- ① 武蔵野女子大学への御寄付をありがとうございます。
- ② 父の苦心の事業は皆様のお力により完成への歩みが続けております。

- ③ 昨年兄様の結婚の折には御父様に何かとお世話になり光栄に存じました。
- ④ 御父様の東洋獄刑史を出版させて頂きたくよろしくお伝え下さい。
- ⑤ 兄様にもよろしくお伝え下さい。
- ⑥ 高楠正男
- ⑦ 花井稲子様

この手紙から見えてくることは、

- ① 高楠正男が、出版社大雄閣書房を営みながら父順次郎の仕事を手伝っていたこと。
 - ② 高楠順次郎が、武蔵野女子学院設立後、女子大学設立に向けて努力を続け、方々の力を得ていたこと。
 - ③ 前年に稲子の兄（花井斐夫）が結婚した折に、花井卓蔵が高楠正男にしたことについて高楠正男が花井卓蔵に御礼を述べていること。
 - ④ 高楠正男が花井家の人々と親しい間柄であること。
 - ⑤ 高楠正男が、花井卓蔵の著作を大雄閣書房から出版したいと考えていたこと。
- である。

しかしながら、不明な点がある。この手紙で高楠正男は、花井卓蔵が寄付をしたことに対する御礼を述べているのか、花井稲子が寄付したことに對する御礼を述べているのか、どちらなのかははっきりしないことである。というのは、稲子は先述のように、この手紙の前年の一九二四年から武蔵野女子学院で歴史を教えているので、稲子本人が寄付をしたとしても不思議はない。しかし、花井卓蔵が高楠順次郎に協力して寄付をしたことは確か^④で、また、稲子が超多忙な父卓蔵に代わって、娘として旧知の高楠家との細かいやりとりをしていた



とも思われるので、高楠正男が父順次郎に代わって、卓蔵が寄付をしたことについて稲子に御礼の手紙を送っても不思議はないのである。花井卓蔵が寄付をした時期が明らかになれば、この疑問は解決できると思われるので、今後の課題としたい。

画像三 書簡二の画像

出所：花井記念室に保管されている書簡を筆者が撮影。

(三) 書簡三について

書簡三は、高楠順次郎の妻である高楠しもが、花井稲子に宛てたものである。封筒の消印の日付けは、昭和四年（一九二九）一月十一日となっている。手紙の内容の概要は、次のとおりである。

① 新年の御祝詞を申し上げます。

② 先日は生憎不在で申し訳ありませんでした。お会いできず残念でした。何よりのお菓子を頂戴しありがとうございます。うございます。早速一つ賞味いたしました。

③ 主人は郷里より帰途

④ 高楠しも

⑤ 花井稲子様

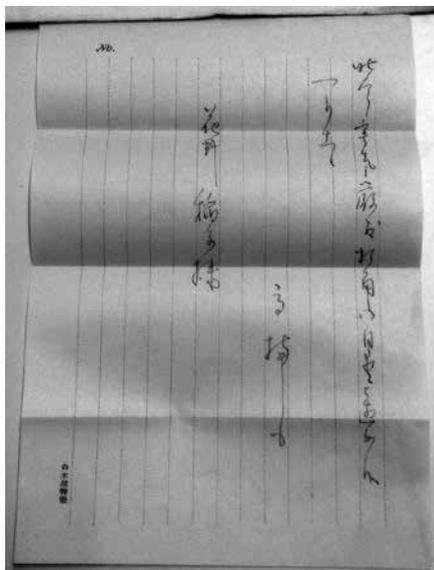
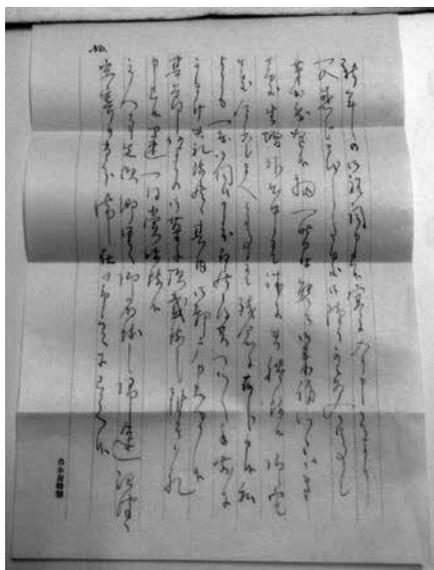
両家が親しくしていたことがわかる内容になっている。

(四) 書簡四について

書簡四は、高楠順次郎が、結城豊太郎が大蔵大臣に就任した際に宛てたものである。手紙が書かれた日付けは、文中に記されていないが、封筒には昭和十二年（一九三七）二月とある。ちなみに、結城豊太郎が大蔵大臣に就任したのは昭和十二年（一九三七年）二月である。便箋には、「TOKYO CLUB 1 SANNENCHO KO-JIMACHIKU」とあり、封筒にはTとCを組み合わせたロゴマークがある。このことから明らか¹⁶なように、この便箋と封筒は、当時麹町区三年町（現在の霞が関）にあった東京倶楽部¹⁶のものである。

手紙の内容の概要は次のとおりである。

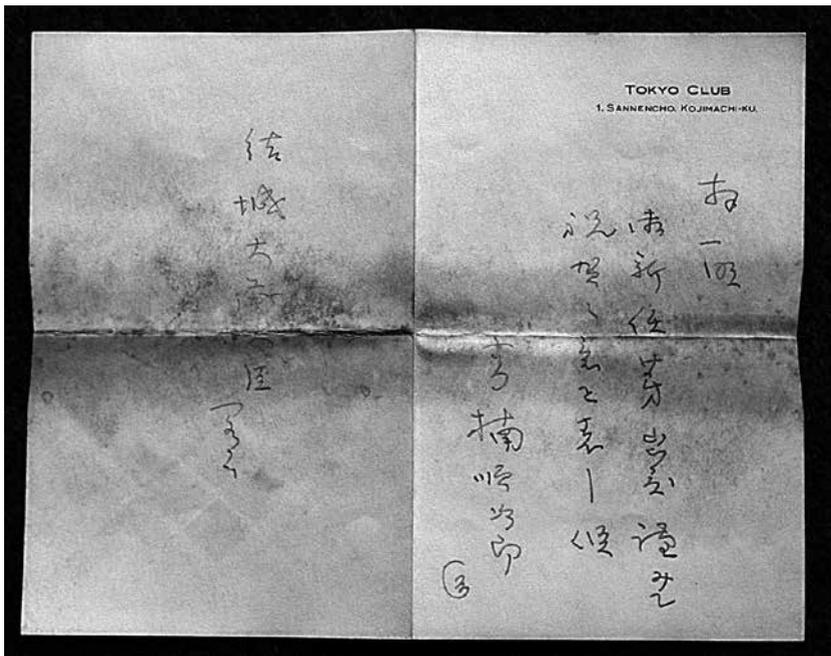
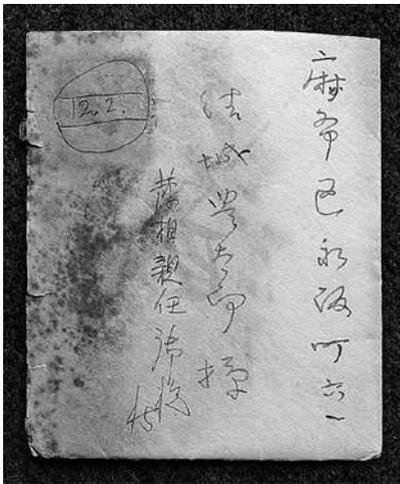
① 大蔵大臣御新任、祝賀の意を表し候。



② 高楠順次郎
 ③ 結城大蔵大臣閣下
 仏教学者の高楠順次郎と、金融・財政・政治の世界で活躍する結城豊太郎は、互いに東京倶楽部の会員とし

画像四 書簡三の画像

出所：花井記念室に保管されている書簡を筆者が撮影。



画像五 書簡四の画像

出所：南陽市立結城豊太郎記念館に保管、展示されている書簡を、
 2016年6月に加藤正人館長に撮影していただいた。

て交流していた可能性が高く、また、その他の会で一緒だったと思われるが、はつきりとはせず今後の課題としたい。しかし、この手紙により、高楠順次郎の交流関係が幅広かったことの一端をうかがい知ることができる。また、封筒裏に「(順次郎)」と書いてあるのは、いつの時点かは不明だが、高楠順次郎の筆跡とは異なると思われるため、手紙の整理のために高楠順次郎以外の者によって書かれたものと思われる。また、封筒に書かれた消印が手書きとなっている理由も不明であるが、これも切手がはがれた後に手紙の整理のために書き加えられた可能性がある。

二 四通の手紙に関わる人々について

前節では、四通の手紙の概要を見た。本節では、四通の手紙に関わる人々について説明する。

書簡一、二、三は、高楠家の人々が花井稲子に宛てたものであった。本稿註(3)でも述べたように、花井稲子は、高楠順次郎の親友である花井卓蔵の二女で、花井忠の妻である。このため、花井稲子について説明する前に、花井卓蔵、花井忠について説明することとする。そして、花井稲子について説明した後に、書簡四の受取人である結城豊太郎について説明する。

(一) 花井卓蔵について

花井卓蔵(慶応四年六月十二日(明治元年(一八六八)七月三十一日)生。昭和六年(一九三一)十二月三日没。)は、弁護士、政治家、法学者として明治から昭和にかけて活躍した人物である。広島藩士立原四郎右

衛門の四男として現在の広島県三原市に生まれ、のちに花井家を継いだ。十歳の時に、長谷川桜南（文政十二年（一八二九）生。明治十八年（一八八五）没。幕末から明治時代の儒者。）の門下生になり、桜南の漢学塾桜南舎で学び、十二歳の時に小学校の教員になった。その後上京し、英吉利法律学校（現在の中央大学）を第一期生として卒業し、当時最年少で弁護士試験に合格した。日比谷焼き打ち事件、足尾銅山争議、大逆事件、シーメンス事件などを含む一万件にもおよぶ事件を弁護した。政治家としては衆議院議員、貴族院議員として活躍した。法学者としては、刑法や刑事訴訟法の改正、陪審法の制定、普通選挙法、宗教団体系案など多くの法律の実現や改正に尽力した。中央大学教授も務め、私学出身者初の法学博士にもなった。昭和六年（一九三一）十二月三日に、東京神田の自宅でガス漏れ事故で亡くなった。勲一等旭日大綬章を叙せられている。

花井卓蔵は、同郷の高楠順次郎と卓蔵が十歳、高楠が十二歳の時に、桜南舎で出会い、卓蔵が十二歳、高楠が十四歳の時にはともに小学校で代用教員を務めた。そして二人は、生涯にわたる親友となった。⁽¹⁷⁾ 花井卓蔵の弁護士開業二十年祝賀会では高楠が祝辞を述べている。⁽¹⁸⁾ 武蔵野女子大学設立に向けて、卓蔵は高楠を支援してきた。⁽¹⁹⁾ 高楠は、卓蔵が亡くなった時には葬儀委員を務め、また、卓蔵が亡くなった後「昭和七年二月二日花井博士追悼講演会」では講演を行っている。ここで高楠は卓蔵が亡くなったことを「私の半分がもぎとられたようだ」と述べている。⁽²⁰⁾

また、築地本願寺和田堀廟所に花井卓蔵と花井家の墓所があるが、そのすぐ近くに高楠順次郎の墓が建てられたのは、高楠が親友である花井卓蔵の墓の近くで眠りたかったからと筆者は聞いている。⁽²¹⁾ 花井卓蔵が亡くなった後も、高楠家と花井家の厚い親交は続き、昭和十三年（一九三八）八月、ハワイ大学東方学院の招聘により高楠順次郎がハワイに旅立った際にも、稲子は二男の花井安を連れて横浜港まで見送りに行っている。⁽²²⁾ 雄弁家として名を馳せた花井卓蔵は「日本のキケロ」と称えられたが、それを最初に言ったのは高楠であるという説もある。⁽²³⁾

(二) 花井忠について

花井稲子の夫、花井忠（明治二十七年（一八九四）十二月三日生。昭和四十八年（一九七三）十月二十日没。）は、弁護士で、検事総長や中央大学教授を務めた人物である。現在の茨城県行方市麻生町に、医師福田安次郎（福田病院院長）の四男三女の次男として生まれた。大正八年（一九一九）七月、東京帝国大学法学部（独法兼修）を卒業。大正十年（一九二一）七月に弁護士になり、著名な弁護士であった花井卓蔵の法律事務所に入った。大正十四年（一九二五）五月に花井卓蔵の二女稲子と結婚し、花井卓蔵の養子となった。昭和四年（一九二九）よりベルリン大学およびウィーン大学に留学し、刑事学を研究した。帰国後は、五・一五事件や神兵隊事件などの裁判で弁護人を務めた。第二次世界大戦後、昭和二十一年（一九四六）八月には、連合軍最高司令部法律局の嘱託となり、東京裁判では広田弘毅元首相の弁護人を務め無罪論を展開した。昭和二十八年（一九五三）一月には、東京高等検察庁検事長になり、昭和三十二年（一九五七）七月には民間出身初で、戦後第三代検事総長に就任した。中央大学教授として後進の指導に当たり、また中央大学理事長も務めた。一九六五年四月には、勲一等瑞宝章を賜る。一九七三年十月五日に、乖離性大動脈瘤破裂により東京神田錦町の自宅で亡くなった。従三位に叙せられ銀杯一組を賜った。

(三) 花井稲子について

さて、書簡一、二、三が宛てられた花井稲子についてである。花井稲子（明治三十三年（一九〇〇）九月十三日生。昭和五十七年（一九八二）六月五日没。）は、花井卓蔵の二女として東京に生まれ、花井忠の妻であったことは先述のとおりである。忠との間に、三男一女（孝、安、清、玲子）をもうけた。

本論文「第一節(一)項の書簡一」からも明らかのように、稲子は二十三歳の時に、高楠順次郎に武蔵野女子学院で歴史を教えて下さいと頼まれて、地歴担当教員として教壇に立ったわけであるが、高楠が稲子に依頼したのは何故だったのだろうか。親友花井卓蔵の娘でよく知っていたからという理由に加えて、稲子は日本女子大の代表的な卒業生で、当時の女性として非常に学歴が高かったことが挙げられるだろう。

稲子を語る上で、日本女子大学との深い関わりは外せない。林えり子によると、稲子は、教育者として有名だった藤原千代(日本女子大の第一回生、明治三十七年(一九〇四)国文学部卒業)と並ぶ女子大の「名物女性」であり、日本女子大を「象徴する」存在で、「看板娘」であった。⁽²⁶⁾

日本女子大学は、成瀬仁蔵⁽²⁷⁾により、日本で初めての女子のための大学として、明治三十四年(一九〇一)に創立された。成瀬は、女子の生涯にわたる教育の意義と重要性を指摘し、創立当初から一貫教育を目指した。このため、大学校開設と同時に五年制の附属高等女学校を設置し、明治三十九年(一九〇六)には、教育学部設立に併せて、附属豊明小学校と豊明幼稚園とを開設した。さらに生涯学習の拠点となる卒業生組織「桜楓会」を発足させ、一貫教育のシステムを完成させていた。⁽²⁸⁾

稲子の父花井卓蔵は、教育者としての藤原千代の素晴らしい評判を聞いて、藤原を花井家に迎えて自分の子供たちの教育係になってもらいたいと考えた。特に、利発な稲子の教育はこれぞという人物に託そうと考えていた。卓蔵は、成瀬を訪ねて藤原勧誘を説いた。しかしながら、逆に成瀬に説得され、藤原が寮監を務める女子大の寮舎「曙寮」に、稲子を預けることになった。林によると、「翌日には、稲子は女子大の附属幼稚園児となった。附属の高等女学校に進んでからは、生家へ戻って通学生として通ったのである。」⁽²⁹⁾

また、林は、「幼稚園から女子大の寮舎に寄宿した者は稲子において他になく、校内で知らぬ者がいなかった。」⁽³⁰⁾と述べているが、稲子の長女青木玲子によると、稲子は幼稚園ではなく小学校(日本女子大学附属豊明

小学校)から入り、豊明小学校の第三回生として卒業した。稲子は一九〇〇年生まれで、豊明小学校の創立は一九〇六年なので、豊明に入ったのが一九〇六年であったとしても、六歳になる年に幼稚園に入園するとは考えにくいので、玲子が指摘するように豊明小学校に入学したのである。しかしいずれにしても、林が指摘するように、幼い時から高等女学校まで曙寮で生活し藤原にわが子のように育てられ、日本女子大に進んで卒業した稲子は、女子大の申し子だった。

稲子は女子大で鎌倉時代の御成敗式目の研究をし、優秀な成績で国文学部を第十九回生として卒業した後、女子学生の入学が認められていなかった東京帝国大学で女性初の聴講生となり、学問を続けた。³¹⁾また、幼い頃から日本女子大に育てられた稲子は、愛校心が非常に強く、同窓会の会長や大学の理事なども務めた。

高楠順次郎が、自らの親友の娘で、女子大の申し子と言われ東京帝国大学で勉強を続けていた、当時の女性として最先端の教育を受けた有名なインテリ女性の稲子に、武蔵野女子学院で教壇に立つてほしいと願ったのは理解できることである。

(四) 結城豊太郎について

書簡四は、高楠順次郎が結城豊太郎に宛てたものであった。本稿註(8)でも少し説明したが、ここでは結城豊太郎とはどういう人物かより詳しく説明する。

結城豊太郎は、明治十年(一八七七)五月二十四日に現在の山形県南陽市赤湯に生まれ、昭和二十六年(一九五一)八月一日に東京麻布の自宅で亡くなった。明治三十二年(一八九九)七月に第二高等學校を卒業し、東京帝国大学へ進学し、一九〇三年(明治三十六)七月に東京帝国大学法科大学政治学科を卒業した。

明治三十七年(一九〇四)一月七日、日本銀行に入行し、日銀ニューヨーク代理店監督役付、大阪支店長な

どを経て、大正八年（一九一九）、日本銀行理事（大阪支店長兼務）に就任した。旧知の安田善次郎の不慮の死をきっかけに日銀を退職し、大正十年（一九二二）十一月に安田保善社専務理事、同年十二月に安田銀行副頭取、大正十五年（一九二六）一月には安田学園理事長に就任した。

昭和四年（一九二九）、欧米視察から帰国した後、安田を退社し産業調査会を設立した。昭和五年（一九三〇）に日本興業銀行第六代総裁に就任し、昭和十一年（一九三六）には、商工組合中央金庫初代理事長となる。昭和十二年（一九三七）には、一月に日本商工会議所第五代会頭に就任し、二月二日には林銑十郎内閣の大蔵大臣兼拓務大臣兼企画庁総裁に就任した。同年五月三十一日には貴族院勅選議員に勅任された。また、同年七月二十七日に第十五代日本銀行総裁に就任し、昭和十九年（一九四四）三月十八日まで務めた。

戦後は、小田原で隠居生活を送り、近くに住んでいた電力王と呼ばれた松永安左エ門（明治八年（一八七五）―昭和四十六年（一九七二）、茶人としては松永耳庵として知られている）と茶の湯を楽しむなどしていた。孫の青木昭を連れて松永家の茶室に行ったエピソードも残っている。昭和二十三年（一九四八）四月には三重県津市結城神社の第二十代宮司になった。その後東京麻布の自宅に戻り、昭和二十六年（一九五一）八月一日に亡くなった。平成七年（一九九五）には、山形県南陽市立結城豊太郎記念館新本館が開館した。紺綬褒章飾版受章。

結 論

四通の手紙を通じてわかったことは、第一に、花井家と高楠家の親密さである。武蔵野女子学院設立後、高

楠順次郎の悲願であった女子大学設立に向けて、花井家の人々は卓蔵の親友である高楠への協力を惜しまなかった。稲子が武蔵野女子学院設立時に歴史の教員として就任したこともその表れである。高楠順次郎と花井卓蔵の友情は素晴らしいと思った。この二人の友情と関係性について、それ自体をテーマにした論稿は筆者が知る限りはないが、今後研究を深め進めていくことにより、その友情から生まれたものや時代背景などが見えてくると思い、引き続き今後の研究課題としたい。第二に、高楠順次郎が大蔵大臣や日銀総裁を務めた結城豊太郎とその周辺の金融、財政、政治の世界の人々と会合を開くなどして随分交流があったことがわかった。この理由や目的については、今後の課題として調べていきたい。

本論文中でも述べているように、今後の課題として残った疑問点や不明な点がいくつかあり、引き続き研究を進めていきたい。

註

- (1) 高楠順次郎（慶應二年（一八六六）生。昭和二十年（一九四五）没。）は、現在の広島県三原市に生まれ、仏教学者として活躍した、武蔵野大学の学祖である。
- (2) 高楠順次郎研究会は、「二〇一七—一八年度 武蔵野女子学院特別研究費（学特）」を得て、『高楠順次郎日記』の研究及び高楠関連資料・情報の継続的収集」を研究課題として開催されている。研究代表者は、武蔵野大学教養教育部会の石上和敬教授である。
- (3) 花井記念室は、花井卓蔵（後述）と花井忠（後述）の花井法律事務所兼花井邸があった東京都千代田区神田錦町に所在する。
- (4) 高楠しも（昭和十四年（一九三九）八月十三日没。享年七十三歳。）は高楠順次郎の妻である。（築地本願寺和田堀廟所の高楠家墓所の墓碑を確認した。）
- (5) 高楠正男（昭和四十一年三月二十四日没。享年六十九歳。）は、高楠順次郎の長男である。（築地本願寺和田堀廟所の高楠家墓所の墓碑を確認した。）

(6) 花井稲子については本稿「四通の手紙に関わる人々について」で詳述するが、高楠順次郎の親友で、弁護士、政治家の花井卓蔵の二女で、花井忠の妻である。花井稲子は筆者の母方の祖母で、花井卓蔵は筆者の曾祖父、花井忠は筆者の祖父である。

(7) 結城豊太郎記念館のホームページ参照のこと。(URL: <http://nansupoddo.jp/nanyo-cl/yuuki/>)

(8) 結城豊太郎(明治十年(一八七七)五月二十四日生。昭和二十六年(一九五二)八月一日没。)については本論文で「四通の手紙に関わる人々について」で詳述するが、現在の山形県南陽市赤湯に生まれ、明治、大正、昭和に日本の金融、財政、政治の世界で活躍し、大蔵大臣、日本銀行総裁を務めた人物である。結城豊太郎は、筆者の父青木昭(昭和六年十一月三十日生。日本銀行理事、日本輸出入銀行副総裁、日本証券金融株式会社社長、会長などを歴任し、現在は日本証券金融株式會社名誉顧問。)の祖父で、筆者の曾祖父である。

(9) 本論文を執筆するにあたり、お世話になった方々にこの場を借りて感謝を申し上げたい。まず、南陽市立結城豊太郎記念館の加藤正人館長に、同館に展示してある高楠順次郎が結城豊太郎に宛てた手紙を撮影して画像を送って頂くなど、協力して頂いたことに御礼申し上げます。また、中央大学大学史資料課中川壽之先生、武蔵野大学の石上和敬先生、漆原徹先生にも手紙の読み方などについてご指導頂いたことに御礼申し上げます。中央大学辞達クラブの浜野茂理事長には、辞達学会が編纂した貴重な書物を賜り御礼申し上げます。

(10) 画像二の「武蔵野女子学院奉職者御芳名」が示すように、花井稲子は大正十三年(一九二四)(武蔵野女子学院設立年)から昭和二十五年(一九五〇)(武蔵野女子短期大学設立年)まで武蔵野女子学院の教員として務めていたが、稲子の長女で、筆者の母青木玲子(昭和十一年(一九三六)八月二十八日生。)によると、玲子を知る限りにおいては、稲子はあまり武蔵野女子学院に出講していなかったようである。

(11) 創立八十周年記念事業委員会誌編纂専門委員編(二〇〇四)、「第二章 築地の地に 第一節 築地に学院誕生」、五一頁「設立認可から教育理想の宣明、教職員の招聘、生徒募集、施設の改善、備品の充当等、短時日のうちに、目まぐるしい経験を重ねた後、武蔵野女子学院は、大正十三年四月二十一日の入学式をもって呱呱の声を上げた。(途中略) 出発当時の教職員の構成を掲出しているが再掲しておく。院長高楠順次郎(修身担当)、幹事鷹谷俊之(同)、主席教諭二宮なほ(国語担当)、大和辰野(教理担当)、恒松安代(国語担当)、金窪良助(音楽担当)、仁平本(国語担当)、吉原もん(裁縫担当)、三宅武郎(国語担当)、花井稲子(地歴担当)、永井綾子(英語担当)、人見忠次郎(数学担当)、伊藤弥(英語担当)、

- 桐ヶ谷かつら（図画担当）、荒木あき（音楽担当）、首藤愛子（図画・習字担当）、森四郎三郎（会計）、島田吉俊（校医）。」
- (12) 武蔵野大学学祖高楠順次郎研究会編（二〇一〇）、七〇～七四頁。高楠順次郎が、関東大震災後も女子大学設立をあきらめずにいたことは、一九二四年一月十日に新聞を通じて、仏教主義の女子大学創設の構想計画を発表したことにも示されている。（同書、七一頁。）
- しかしながら、その後と思われる一九二四（大正十三年）年の初春の集まりで、築地本願寺の後藤環爾輪番が次のように高楠に話したことが、高楠の方針転換に大きな影響を与えたと思われる。「あなたは女子大学を立てると公言してお出でになるが、大学は中学から初まるのであります。先づ女学校を即座にお始めになっては如何です。」（同書七二～三頁。）
- (13) 同書、七一頁。
- (14) 同書、一一一頁。
- (15) 村松（一九五九）、一八〇頁。
- (16) 東京倶楽部は、明治十七年（一八八四）に設立された。同倶楽部のホームページによると、「設立当時の日本は不平等条約の改正という重大な国際問題に直面しており、時の外務大臣井上馨卿等が英国に範をとったジェントルマンズ・クラブとして東京倶楽部の設立を発案しました。」「東京倶楽部は設立当初、鹿鳴館に同居しておりましたが、その後、新橋、あるいは霞が関の倶楽部ハウスで活動を続け、現在は港区六本木一丁目に移転しております。」とある。（社団法人東京倶楽部ホームページ「倶楽部の歩み」より）
- (17) 高楠「五十年の知己花井君 昭和七年二月二日花井博士追悼講演会より」三三六頁。
- (18) 高楠「花井卓蔵・弁護士開業二十年祝賀会 祝辞」。
- (19) 武蔵野大学学祖高楠順次郎研究会編（二〇一〇）、一一一頁、創立八十周年記念事業委員会記念誌編纂専門委員編（二〇〇四）、七四頁。
- (20) 高楠「五十年の知己花井君 昭和七年二月二日花井博士追悼講演会より」。
- (21) 筆者の伯父花井孝（大正十五年～一九二六）六月十日生。平成二十七年（二〇一五）年九月十七日没。談。
- (22) 武蔵野大学学祖高楠順次郎研究会編（二〇一〇）、一一三頁。
- (23) これは、筆者が伯父花井安（昭和三年～一九二八）二月十七日生。平成二十六年（二〇一四）十一月二十六日没。から聞いた話である。

- (24) 村松前掲書、九三頁、中央大学学員会辞達クラブ、中央大学辞達学会井史編纂委員会編（一九七八）、一九頁。「帝国憲法起草者穂積陳重博士は、愛蔵の「キケロの胸像を卓蔵に贈り、キケロと卓蔵を比肩している。キケロは古代ローマの大法曹であり大政治家でもあった。その雄弁はギリシヤのデモステネスと共に古代の双壁と謳われた。花井卓蔵は日本のキケロである。卓蔵も又、大法曹であると共に大政治家である。殊にその雄弁は空前絶後とさえ言われている。」一三頁、花井記念室には、穂積博士が花井卓蔵を「日本のキケロ」と讃えた書が掛けられている。
- (25) 菊池（一九八二）、九七頁。「當時、この裁判を傍聴に行った彼の親友高楠博士は、今更の如く彼の弁論の力に感動し、花井卓蔵を称して『日本のシセロ』であるとまで讃へた。」
- (26) 林（一九八八）、六八〜九頁。
- (27) 成瀬仁蔵（一八五八年八月二日〔安政五年六月二十三日〕生。一九一九年〔大正八〕三月四日没。）は、現在の山口県山口市吉敷に生まれた。日本女子大学（創立時は日本女子大学校）の創立者で、日本の女子教育の開拓者である。
- (28) 日本女子大学附属豊明小学校ホームページ、二〇一七年九月八日閲覧。
- (29) 林前掲書、六九頁。
- (30) 同書、同頁。
- (31) 村松前掲書、一八〇頁。
- (32) 秋田（一九九六）、四六六頁。
- (33) 花井（二〇〇五）では、二人の友情関係が重要なテーマの一つとなっており、また、二人の貴重なツーショット写真も掲載されている。著者花井清（昭和五年〔一九三〇〕四月十八日生。平成二十八年〔二〇一六〕九月一日没。）は筆者の伯父である。

参考資料

- ・ 秋田博『銀行ノ生命ハ信用ニ在リ―結城豊太郎の生涯―一九九六年、日本放送出版協会。
- ・ 菊池寛監修「花井卓蔵」、『復刻版 日本英雄傳 第八卷上』、一九八二年、日本英雄傳刊行会、九二〜九七頁。（この本は次の本の復刻版である。菊池寛監修『日本英雄傳 第八卷上』、一九三六年、非凡閣。）

- ・ 社団法人東京倶楽部ホームページ「倶楽部の歩み」
URL: <http://www.tokyoclub.or.jp/history.html> (二〇一七年九月十三日閲覧)
- ・ 創立八十周年記念事業委員会記念誌編纂専門委員編『武蔵野女子学院八十年史』二〇〇四年、ぎょうせい。
- ・ 高楠順次郎「花井卓蔵・弁護士開業二十年祝賀会 祝辞」明治四十三年(一九一〇)、中央大学辞達学会創立百周年記念事業実行委員会(記念誌編纂部会部長造免臣洋)編『中央大学辞達学会百年史 獅子吼百年』二〇〇一年、ジャパン・プランニング(株)、一四頁。
- ・ 高楠順次郎「五十年の知己花井君 昭和七年二月二日花井博士追悼講演会より」中央大学辞達学会創立百周年記念事業実行委員会(記念誌編纂部会部長造免臣洋)編『中央大学辞達学会百年史 獅子吼百年』二〇〇一年、ジャパン・プランニング(株)、三三六～三四頁。
- ・ 中央大学学員会辞達クラブ、中央大学辞達学会井史編纂委員会(委員長堂野達也)編『中央大学辞達学会史』、一九七八年、中央大学出版部。
- ・ 中央大学辞達学会創立百周年記念事業実行委員会(記念誌編纂部会部長造免臣洋)編『中央大学辞達学会百年史 獅子吼百年』二〇〇一年、ジャパン・プランニング(株)。
- ・ 中川壽之「中央大学が生んだ花井卓蔵の魅力」『辞達 辞達クラブ会報』vol. 17、二〇一四年、中央大学学員会辞達クラブ支部、三～七頁。
- ・ 長嶺超輝「伝説の弁護士、会心の一撃!」二〇一三年、中央公論社。
- ・ 日本女子大学附属豊明小学校ホームページ「豊明小学校について 一貫教育」
URL: <https://www.jwu.ac.jp/elm/prospectus/consist.html> (二〇一七年九月八日閲覧)。
- ・ 花井清「高楠順次郎 日独協会編」『Brückenbauer: Pioniere des japanisch-deutschen Kulturtausches / 日独交流の架け橋を築いた人々』二〇〇五年、München: Indicum。
- ・ 林えり子『日本女子大桂華寮』、一九八八年、新潮社。
- ・ 星新一「花井卓蔵『明治の人物誌』新潮社刊より」、中央大学辞達学会創立百周年記念事業実行委員会(記念誌編纂部会部長造免臣洋)編『中央大学辞達学会百年史 獅子吼百年』二〇〇一年、ジャパン・プランニング(株)、二九三～三二〇頁。
- ・ 星新一『明治の人物誌』一九九八年、新潮社。

- ・三原市ホームページ「三原市教育委員会」郷土三原ゆかりの人たち 長谷川桜南「掲載日：二〇一四年四月一日更新。URL：<https://www.city.mihara.hiroshima.jp/site/kyouiku/yukari0.html>（二〇一七年九月六日閲覧。）
- ・三原市ホームページ「三原市教育委員会」郷土三原ゆかりの人たち 花井卓蔵「掲載日：二〇一四年四月一日更新。URL：<http://www.city.mihara.hiroshima.jp/site/kyouiku/yukari14.html>（二〇一七年九月六日閲覧。）
- ・三原市ホームページ「三原市教育委員会」郷土三原ゆかりの人たち 高楠順次郎「掲載日：二〇一四年四月一日更新。URL：<https://www.city.mihara.hiroshima.jp/site/kyouiku/yukari13.html>（二〇一七年九月十五日閲覧。）
- ・武蔵野大学学祖高楠順次郎研究会編（二〇一〇）『高楠順次郎の教育理念《抜粹》』武蔵野大学。
- ・村松梢風『花の弁論』、一九五九年、中央公論社。
- ・八木慶和著・齋藤壽彦監修『日本銀行総裁結城豊太郎―書簡にみるその半生―』二〇〇七年、学術出版会。

（武蔵野大学法学部准教授（専門）政治思想史）